

序

今日ほど、教育が熱心に論議される時代は、おそらくないと思われる。たしかに、現在の教育界には、「おちこぼれる子ども」「校内暴力」「受験苦」等、多くの問題が山積している。これらの問題を解決することは、決して容易ではないが、教師が、子どもの立場にたち、日々の授業実践に真剣に立ち向う努力によって、その重圧が幾分なりとも取りのぞかれることは疑いあるまい。

われわれは、この考えを基に、「ゆとりと充実」をめざす新指導要領の基本路線に呼応して、「よろこびを生む授業」の実現に取り組んだのであった。それから四年間、研究の歩みは速やかではなかったが、一步一步、解決へと迫ったことは事実である。第一年次は、よろこびの要素を抽出し第二年次では、よろこびの相と条件を明らかにした。第三年次では、授業の設計・実施・評価の各過程において、「情意」と「体験」を追求した。

第四年目にあたる本年度においては、従来の研究の論理をふりかえると共に、再び素朴な観点に立ち返り、教師のありかたと子どもの姿を見つめた。そして、よろこびを生む授業とは、子どもが眼を輝やかせ「問いかけ求めつづける姿」こそ、その要諦と悟り、そのようにサブテーマを設定したのである。この一年、子ども一人ひとりを経験の中で生かそうとの試みや、子どもの実態をたしかめ教師のありかたを厳しくみつめようとの努力が続けられた。

果して、われわれの授業に、この努力が結実しているか否かは、諸賢のご批判にまつよりはかはない。ただ、この間において、われわれの積み重ねた実践を、冊子としてまとめてここに発表する。各方面の識者や先輩諸兄のご意見、ご指導をお願い申しあげる。なお、本年度の研究を進めるにあたり、日本女子大学梶田勲一先生、ならびに金沢大学教育学部諸先生の熱心なご指導をいただいた。ここに厚く謝意を表する。

昭和 56 年 5 月 27 日

金沢大学教育学部附属小学校長

山 崎 豊